

思い出の記

私のタイ国従軍記(二)

岐阜県 松葉定雄

七 車掌の仕事

昭和二十(一九四五)年四月、退院して部隊本部に帰ったところ、バンポンマイ駅所属の車掌という辞令をもらい赴任しました。

バンポンマイ駅はノンプラドックの起点よりすぐの所でした。この車掌は機関区出身の機関士の者ばかり六人で、九州出身の人が多く、車掌長は品川車掌区出身の車掌でした。一日一本か二本の列車に乗務してワンヤイまで往復するだけで、

毎日の乗務でもなく楽な仕事でした。

しかし、その中で一番怖い仕事がありました。それは、ビルマの首相が泰緬鉄道を通ってバンコクへ会議に行くというのです。

その直前に試運転の列車を走らせて、首相を完全に輸送するために、深夜、機関車の前に貨車(トロッコ車)二両をつけ、前の車両にカンテラ一個を持って乗務するのです。連合軍か、またはテロが爆薬を布設していないか試運転するのです。いつドカンと線路が爆破されるかもしれないので、乗務していても生きた心地がしませんでした。幸い事故もなく乗務を終えることが出来ました。

泰緬鉄道の軌間は一、〇〇〇ミリメートルで日本の軌間一、〇六七ミリメートルより狭くなって

おりました。日本から持ってきた「C56型機関車」

「ワム型貨車」は改造して使った関係で、脱線し易いのではないかと思われます。機関士として乗務していた人達の話や聞くと「山また山の急勾配の上り、下りの連続で、脱線事故はしょっちゅうで、機関車の前部に復線器と枕木数本を搭載して、脱線したときはそれらの器材を使って機関助士(現地人労務者)と二人で復旧作業をして運転し、木橋を通過するときは、ギシギシと鳴って、今にも橋がこわれるようで本当に命がけの運転だった」との話や聞き、地上勤務でよかったと思っただけでした。

また、こんなこともありました。内地からの軍の慰問ということで映画会がありました。野外にシートを張っただけのスクリーンで、映画は「愛染かつら」「結婚の生熊」等が上映されました。

大和郡山市出身の沢田さんという方が、その後、宿舎の庭のマンゴの木にしめ縄を張り「愛染マンゴ」と名付け、愛染マンゴの歌を作詞作曲して

皆で歌って楽しんでいました。

私は、炊事場で下働きに使っている二歳年下の娘(名をチュルンという)がちよっと好きだったので、愛染マンゴの木の下へ一緒に行って、彼女に「二人でマンゴの木にふれよう」と言ったのですが、愛染かつらの映画を見たのか彼女はなかなか手を触れることをしませんでした。いつも兄さんと呼んでいたのも、手をマンゴの木に触れなかったのでしょうか。私の淡い片思いの恋でした。

バンポンマイは平地だったので食事は大変良く、野菜は豊富で、豆腐や鶏等もよく出て、ニケ時代とは雲泥の差でした。そしてバンポンマイでも空襲は激しく、週三、四回は機銃掃射に、また爆撃も週一、二回はやってきました。サイレン爆弾というのがあって、投下してから地上に落ちるまでヒュルヒュルといやな音をたてて落ちる。気味が悪く、神経戦をねらったもので、地面に落ちてから爆発するのです。

また私達はプロペラ爆弾といっていました、

弾にプロペラのような羽根がついていて、投下してから地上に落ちるまで回転しながら落ち、ジャングルの直径十センチ位の木は切れてしまうのです。立っていると危険なので伏せているか遠くへ逃げていました。これも地上に落ちてから爆破するのです。

ニーケの経験から、遠く離れたジャングルの中に逃げ込んで難を逃れていました。

八 終 戦

昭和二十年八月十五日、終戦となりました。私達がそれを知ったのは翌十六日の朝でした。地区の停車場司令部から伝達事項があるからというので駅長が聞きに行ったところ、十五日に日本が無条件降伏し、戦争は終わったとのことでした。

今の今まで戦争は勝つと思ってタイ国までやって来たのに、頭をガンと殴られたようなショックでした。今まで一生懸命やってきたのに、目の前が真っ暗になり、神も仏もあるものか、そんな気持ちになりました。

戦争は負けているのだと思いました。

そう言えば、八月七日付けのバンコク日報（邦字新聞）には「八月六日、広島に新型爆弾が投下され、被害甚大である」と報じていました。続いて八月十日付けには「またも長崎に新型爆弾が投下され被害甚大」とあり、私達はどんな爆弾なのか分からず、不安はつのるばかりでした。

終戦後、一カ月程たったとき、連合軍（イギリスとオランダ）の兵隊が来て武装解除を命じ、銃や弾薬、刀剣等を一方所に集め貨車に積んで持って行きました。駅員の中には家宝の刀を持って行かれたと嘆く人もいました。その時、帽子の前にある黄色の星のマークを取れとのことでむしり取ったので敗戦を実感したのでした。

終戦後の十一月に、戦争中日本軍が捕虜として使役した連合軍の兵士や、日本軍に使われた現地人の労務者のうち虐待されたといつて、その人達を連れて来ました。首実験をするのです。私達がホームに一列に並んでいると、そこへ連合軍の兵

一週間程たったとき、夜銃声がしたので驚いて外へ出てみたら、鹿児島出身の車掌のSさんが銃で自殺していました。悲しい出来事でびっくりしました。ホームの片隅に穴を掘って所持品と共に埋葬しました。それから三日後に、熊本県出身の同じく車掌のKさんの遺体も同じように埋葬し、ご冥福をお祈りしました。

ところが、夜、タイ人の泥棒が穴を掘り返して所持品を盗って行ったので、私達は交代で寝ずの番をして遺体を見守ることを一週間ほど続けたら、泥棒も来ないようにになりました。SさんとKさんの二人は敗戦のショックで発作的に自殺されたのだと思います。

終戦前は毎日の仕事（輸送業務）をしているなかでも空襲は激しくなるばかりでした。輸送するものといえば、昭和十九年まではビルマ方面へ武器、弾薬、兵隊、食糧等であったのが、昭和二十年に入ってから、ビルマ方面からの負傷兵をバンコクに輸送するのが仕事でした。ビルマ方面の

士と労務者が私達の顔を見ながら通って行くのです。

その時に「この人だ」と彼等から指をさされた人は、即時に戦犯（戦争犯罪人）として連行され、裁判にかけられるのです。

私はニーケ機関区時代に炊事当番として、日本人隊員の食事と労務者の食糧の管理をしていましたが、当時の事務助役が隊員及び労務者の人数を増しして兵站部隊に報告し、米、調味料、野菜等は充分支給されていましたので、労務者に不満はないと思っていました。また時々あひるや鶏や野菜等を持って宿舎に行き、料理して一緒に食事をして大変喜ばれていました。

「植民地時代には、白人はそんなことはなかった。日本人は宿舎まで来て、一緒に食事をしてくれ大変嬉しい」と喜んでいました。それで戦犯として、指をさされるようなことはないと思いたっていたものの、指されたらと思うと生きた心地はありませんでした。

当時、労務者や捕虜の管理をしていた人の中に、高橋とか田中といった名前の人は無条件に引つ張られていきました。多分労務者や捕虜が名前を覚えていて何処かで虐待されていたのかも知れませんが。彼等は私達の前に立ち止まらないで通り過ぎて無事首実験が終わりました。

九 不安の日々

これから私達はどうかなるのか、さっぱりわからないので不安の毎日でしたが、取敢えず沿線各地に連合軍が駐屯しているので、その食糧等を輸送する仕事を与えられ、従来通り輸送業務をする事になりました。

食事はA、B、Cと別れており、Aクラスは収容所において何もしない捕虜生活者、Bクラスは私達輸送業務をする者、Cクラスは連合軍の命令で宿舎を建てたり、色々な仕事をする者です。食事の量はAクラスは一番少なく、Bクラスはマアマアで、Cクラスが一番多いのでした。

しばらくすると、連合軍による身体検査と持ち

物検査がありました。駅のホームに自分の持ち物のリックサックを持ってホームに並んでいると、現地召集になった、かつての労務者だったのが兵隊となり、身体検査と持ち物検査をして行きました。

私の前を通って検査した兵隊は、ニーケ機関区時代に一緒にいた労務者だったので、私はリックサックの紐に手をかけて解きほどうとすると、「マスター、OK」と言っても見ないで次の人のところへ行きました。私はホッとしました。ニーケ時代に人間的な付合をしていたことを彼等も感じていたのだと思いました。

十 機関区の地上勤務

昭和二十年十一月、ワンヤイ機関区へ転勤になりました。起点のノンプラドックからワンヤイまでは大体平坦な線路でしたが、ワンヤイから先は山また山で、ジャングルばかりの急勾配の多い線路でした。

ワンヤイまではマレー半島で使っていた機関車

を使い、ワンヤイから先は内地から持ってきた力の強い「C56型機関車」が、同じく内地から持ってきたワム型貨車五両を連結して使われました。

私の仕事は機関車に乗務しないで、機関車の検査、修繕の手伝いとボイラーの湯垢の掃除をすることでした。ここでは機関士見習は二人で、和歌山出身の木村君と一緒に仕事をしました。仕事のボイラーの湯垢の掃除は、内地で機関助手をしていたとき一寸見ただけなので要領が分からず、検査掛かりの人に聞きながら覚えました。

ボイラーの火と水を落して冷めてから湯垢を掃除した後にはボイラーに水を張り、缶に点火して蒸気を上げ運転できるようにするのですが、薪を缶の中に入れる作業をしているとき、薪の裏側についていたサソリの幼虫に左手の中指を刺されました。早速刺されたところに口を当てて毒を吸い取り、地区の診療所で消毒をしてもらいました。

中指のしびれは一日程でおさまり全治しました。「サソリ」の幼虫で尻尾の節が四つでしたから良

かったものの、成虫の七つの節のあるものなら死んでいたかも知れないし、血清を注射しないと治らないということでした。それからは薪を扱うときは裏側を見てくべるように注意しました。

年が明けて昭和二十一年四月、カンブリー機関区に転勤になりました。カンブリー機関区は起点のノンプラドックより五十キロの地点にあるのですが、戦争中空襲を避けるため、機関車の検査、修繕部門は二キロ手前にあり、そこへ赴任しました。ここは通称「四十八キロ」と言っていました。

ここでの仕事はワンヤイ機関区のとくと同様、検査、修繕の手伝いとボイラーの掃除でした。機関士見習は私一人で、もう一人は機関士の大阪出身の宮村さんという方でした。隊員は助役、検査係、技工と機関士で年配の人ばかり十二人でした。

ここでの食事は五十キロの本区から、三度の食事を食缶に入れて、機関車に積んで持ってくるのですが、あまり良い食事ではありませんでした。三重県出身の鈴木さんという人が百姓の経験があ

るとかで、宿舍の庭に畑を作って、長豆、きゅうり、なす等を作ってくれました。また、南京袋を湿らせてそこへ豆（緑色をした豆）を一晩水に漬けたものをばらまいて、四、五日もすると、もやしが出来、野菜の不足を補うことが出来ました。

また、戦争中に、内地へ土産品として、皮製品（財布、靴、鞆、皮バンド等）、象牙製品（印材、装飾品等）をバンポーンマイ時代に買って持っていたのですが、いつ帰れるかも知れないし、食事もあまり良くないので、それ等を売り食いしていました。

また、京都出身の大変酒好きな方がいて、兵站部隊より屑米を貰ってきて、ドラム缶と鍋を利用して酒を作りました。屑米バケツ一杯で飯盒に三杯の酒が出来ました。最初一杯は強い酒が出来、二杯目は普通で三杯目は少し弱いので、それらを混ぜて加減して皆で飲みました。

その頃、終戦後相当の月日が経ったのに、内地へ帰れる日もさっぱり分からず、その間、ニュー

ギニアへ捕虜として強制労働に行かされるとか、日本へは帰れないとかいう噂が飛んで、皆の心はすきんで自暴自棄になり、酒を飲む日が多くなりました。

また、宿舍の隊員の物や、機関車の部品が盗まれることが多発して困っていました。部隊から連合軍に話して、五人に一丁の割合で小銃を所持することが許可されましたが、この情報が流れたのか、その後盗難事件は有りませんでした。

戦争中にマレー半島から持って来た機関車をマレー半島に返すことになり、その一両を私に「バンコクまで輸送して来い」と言われ、既に現地人労務者は終戦後故国に送還されていないので、私が機関助手としてバンコクまで乗務しました。当時の詳しいことは覚えていません。機関車に乗務したのは、今回一回限りでした。

十一 帰 国

そんなある日、昭和二十一年九月、日本へ帰れるというニュースが入り、皆大変喜んだものでし

た。出発の前日には蚊帳等を買って、鶏、野菜等を買って焼きパーティをしました。

しかし、帰る条件として、病人を優先して帰すことになりました。すると、病人と称する人が続出し、一足先にバンコクの収容所の方へ行きまし

た。私は健康であったので一番最後の引揚げ列車で、バンコクへ向かいました。

収容所に入るとき、連合軍のいる前で部隊名と名前を言うと、白い札と赤い札を持った兵隊が私に白い札を渡し、白い札はこちらへと指示され、収容所に入りました。

坂下さんも、清水君も白い札を貰って同じ収容所に入りましたが、落合さんの姿が見えません。間違えて他の棟の収容所に入ったのではないかと、三人で他の収容所を探しましたが見当りませんでした。

私達は落合さんは赤い札を貰って戦犯の方へ行ったのではないかと心配しました。高山へ帰ってから、落合さんは残務整理のため少し遅れますと家族に話をしようと話し合いました。

収容所では、何もすることもなく、ただ食事をしてブラブラしていました。病人と称して先にバンコクの収容所へ行った人達も同じ収容所の別の棟にいて、同じ復員船で帰りました。

三日後に小さな船に乗って沖合にいる復員船に乗りました。復員船は元航空母艦「葛城」でした。甲板には爆撃で受けた大きな穴が幾つもあり、機銃掃射の穴も沢山ありました。ここでも日本が敗けたのだと実感したことでした。この船に乗ったら日本へ帰れるのかと思ったら嬉し涙が出て来ました。

「葛城」に乗ってから、出航前に、連合軍から戦犯の人数が足りないのです、百人を出すように指示されました。私達は五十人単位で班を作っていたのですが、一班と二班が出ることになり、二班の私は船内の友達に、時計や身の回り品を預けて、戦犯になるかも知れないから後の事はよろしく頼むと覚悟をきめて甲板へ出ました。しかし、部隊長以下幹部の人が連合軍に対して「この船は船尾

に日の丸の国旗を着けており、日本の国土と同じである。一度船に乗ったものは日本の国土と同じであるから戦犯に出すことは出来ない」と強硬に交渉したところ、それでは五十人でよいと言うことになり、二班にいた私は再び船室に戻ることが出来ました。戦犯にならずにすんだと五十人の人達と船室の友達と共に喜び合いました。

一班の五十人は、また小さな船に乗ってバンコクへ戻って行きました。後から聞いたところ、この人達は戦犯として抑留されましたが、翌昭和二十二年九月に内地へ帰れたそうです。

私達の復員船は昭和二十一年十月、バンコクを出航し日本へ向かいました。

十二 ふる里高山へ

途中、香港に寄港し、水等を補給して再び日本へ向かいました。香港を過ぎると寒くなり、夏服一枚の私達は風邪をひいてしまいました。途中、遠州灘を通過する時、快晴で富士山がくつきり見え、ようやく日本に帰ったのだと実感しました。

ら「のみやしらみを駆除するためにDDTを散布した」と言われ、体中が真っ白になりました。次にズボンを下げてうつぶいっていると、看護婦がお尻にガラス棒を入れて便の検査をしました。次に医師が性器をつまんで性病の検査をしましたが、私はすべて合格して帰れることになりました。

復員の日程を聞いて、家へ電報を打つべく、出張してきた郵便局の人に「岐阜県の高山まで電報を打ちたいのだが」と言うと「電報は今、日数がかかるから、本人の方が早く着くかも知れない」と言われたのですが、それでも一応打っておきました。

復員船の中で、負けて帰るのだから、昼間帰るのでは恥ずかしいから、夜に高山に着くようにしようと話し合っていました。日本へ着いた途端に、一刻も早く帰りたいの一念でした。

十一月五日、特別仕立の復員列車が品川駅を二十一時に出て大阪まで行くということでそれに乗って岐阜へ朝早く着き、岐阜発一番の列車に乗り、

昭和二十一年十一月二日、浦賀に上陸し、雨の中を歩いて横須賀の援護所に入りました。援護所の食事等は大変良く、旧陸軍の木綿の冬服一着と、ランシャの冬服一着と毛布一枚が支給されました。援護所の人からは「貴方たちが一番待遇が良く、衣服も沢山貰えた」と言われました。

それとは別に、国鉄からどういう訳か上下続いた茶色の飛行服が支給されました。夏服一枚で復員して来て、寒くて震えていたので大変助かりました。

翌三日、食事の時赤飯が出たので何の日か聞いたところ、新しい憲法が公布された日で、その祝の赤飯が出たということでした。ここで、戦後の日本は新しい民主主義の国になったのだと思いました。

翌日、援護所の外に一列に並んでいると、白衣を着た医師と看護婦が来て、左右の袖口と首から背中に向け、また、ズボンの上から両足に向けて白い粉をポンプで入れられました。何かと聞いた

朝九時頃高山へ着きました。

高山では、父と従兄弟の昌一君が迎えに来てくれて、昌一君に「定雄さんや」といち早く見つけられて抱き合い、父とも抱き合い、復員を喜びました。兄はその頃東京にある逓信省の学校の学生で不在でした。

父の話によると、終戦後NHKのラジオの「復員だより」で復員する部隊名「泰派遣岡五八二一部隊」と放送されないかとラジオにしがみついていたそうでした。

昭和二十一年十一月、私の部隊名が放送され、その後で私から電報が来たので、父は坂下さんと清水さんに「皆が帰ってくるから駅へ迎えに行こう」と言ったが「家は電報が来ないから帰らないだろう」という清水さんや坂下さんと連れ立って駅へ行ったところ、皆がそろって帰って来たので一同喜びあいました。

復員して家族と一緒に生活できるということは何よりも幸せなことで、戦争に軍属として行った

私は、幸いにも無事に帰って来ることが出来て良かったけれど、不幸にして戦死等された方々を思うと胸が痛み、戦争など二度とすべきでなく、子孫にも伝えて行かなければと思います。

十一月中は休んで、十二月より出勤しました。

月給五十五円に昇給したのですが、月給八百円になり、こんな高給取りになったのかとびつくりしましたが、戦後のインフレによる物価高で、八百円でもなかなか生活が楽でなく苦しいものでした。

また、職名が機関助手であったので区長に話したのが分かってもらえず、他の機関区より従軍した友達に話して、タイ国で試験に合格して機関士見習になったのだから、機関士見習にと交渉したところ、戦争中に部隊より連絡があったとのこと、後日、機関士見習になることが出来ました。

昭和二十二年一月、家のまへの除雪をしたところ寒気がしたので、マラリヤになっては大変と、タイ国から持ち帰ったキニーネの錠剤を大目に飲んで、コタツに「スッポリ入って」寝ていたら発

熱せずにやれやれと思いました。戦争中、南方や南支那へ行った人で復員後、四回も五回もマラリヤで発熱したことがあるという話を聞き、私はキニーネのおかげで発熱せずによかったと思います。

今次第二次世界大戦後、幾つかの戦争や内紛がありました。朝鮮戦争、ベトナム戦争、また湾岸戦争等。また、アメリカに対するテロ事件等がありました。また、戦争に行つて死ぬ人や何も知らない小さな子供までをも犠牲にする戦争や内紛はもう止めて、戦争のない平和な世界でありたいと思うこの頃です。

今、再び振り返ってみると、家族共々健康であること、家族みんな仲良く暮せること、日本及び世界各国とも仲良くしていくこと、これが世界平和になると思います。

そして、国内で空襲等で犠牲になった人、戦地で亡くなった人達のご冥福を祈りながらペンを置きます。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十八年、十八歳から国鉄高山機関区に勤務、その職歴により鉄道部隊の軍属となり、内地での訓練を経て、昭和十九年一月八日、泰にあつた「泰派遣五八二二部隊」(第十特設鉄道運輸隊)に派遣された。

この鉄道運輸隊は、泰緬鉄道を運営する部隊で、既に鉄道第九連隊(鉄九)が建設した鉄道を鉄九と交代して運営することを任務としていた。

「鉄九」も昭和十六年九月、津田沼で編成され、北部仏印に派遣された鉄道連隊で、主として国鉄職員を軍属として召集して編成された部隊が多い。

この「鉄九」は泰国上陸作戦より泰国に入り、泰緬鉄道の建設に当たった。建設には、第二鉄道監指揮の下に「鉄九」は泰側から、「鉄五」は緬甸側から、歩兵、工兵、その他の部隊一万四千人、それに捕虜約五万人、現地労働者約九万人という陣容で建設に当たり、昭和十七年七月より建設開始、同十八年十月までに建設を完了した鉄道であ

る。

当時のビルマの戦況は、昭和十九年七月、インパール作戦に敗れた日本軍十万は、雪崩をうって総退却となった。時期は雨季であり、泥海に膝を屈するという惨憺たる退却行であった。

進軍のために建設された泰緬鉄道は、敗残の日本将兵を後送する鉄道にもなった面もあった。終戦前は毎日の輸送業務といえば、昭和十九年まではビルマ方面へ武器、弾薬、兵隊、食糧等であったのが、昭和二十年に入ってから、ビルマ方面からの負傷兵をバンコクに輸送するのが仕事となり終戦を迎えている。

「鉄九」は武装解除後も引き続き任務に従事し、昭和二十一年六月二十六日、ムドンの日本軍の宿営地に集結、二十八日北緬に入り、ここでもまだビルマ鉄道会社の復旧工事に従事、ようやく昭和二十二年一月七日、マンダレーに集結する。

そしてラングーンで復員船「大安丸」に乗船したのは七月十九日、佐世保に上陸・復員が完結し

たのは、実に終戦二年後の昭和二十二年八月八日であつた。

徴用と軍隊

富山県 紺谷 正三

大正十二（一九二三）年富山県新湊町で紺谷与三の六男として生れる。昭和十六（一九四一）年三月、伏木商業学校卒業、石炭販売会社に就職する。

―徴用工員時代―

昭和十六年九月、当時白紙動員と呼ばれた徴用を受け名古屋陸軍造兵廠千種工場に配属された。宿舎は全寮制で寮長は陸軍曹長だった。朝六時、起床ラッパで飛び起き、点呼、体操を終わって部屋へ駆け足で帰り布団を収め掃除していると、直ぐ食事ラッパが鳴る。箸箱を持って食堂へ行く。食後、隊列を組んで工場へ出勤する。歯を磨き顔を洗っている暇がない。私は幸い事務所勤務だったので出勤後事務所の台所で歯を磨き洗面することが出来た。